

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 ギュヴェン デヴリム チェティン

ギュヴェン・デヴリム・チェティン氏の博士学位申請論文「大江文学における『第三世界』と日本」の表象—「アルジェリア戦争の時代」と『われらの時代』周辺作品を中心に—is、大江健三郎の初期小説群を、同じ時期に形成されていた「第三世界」という非同盟の在り方の理論的な枠組の中でとらえ直そうとするものである。

対象とされたのは、大江の「見る前に跳べ」、「喝采」、「セヴンティーン」、「われらの時代」である。同時代的な理論的枠組としては、反植民地主義闘争としてのアルジェリア戦争の中で発表されていったジャン＝ポール・サルトルやフランツ・ファノンの反植民地主義理論が参照されている。

しかし大江はノーベル文学賞受賞後、自らの文学を世界文学の中で位置づけることに意識的になり、自らの文学を「周辺」としての「第三世界」文学との親近性の中で捉えるようになっていく。この時期以後の大江の発言とのかかわりにおいては、生涯にわたって親しく大江がかかわった、エドワード・サイードのポストコロニアル理論に基づいた分析がなされている。大江の初期作品を、現在の「晩年の仕事」（レイト・ワーク）とのかかわりにおいて、遡及的（レトロスペクティブ）に位置づけ直すことも本論文の重要な主題となっている。

第一章では「見る前に跳べ」（1958.6）が中心的に論じられ、日本における砂川闘争とのかかわりにおいて、サルトルが問題化した、「政治的な参加」（アンガジュマン）と「政治的離脱」（デザンガジュマン）との関係が分析されている。これまでこの小説は当時の日本の青年の停滞状態を描いたとされてきたが、本論文では「第三世界」の立場から、欧米をモデルにしようとした日本の学生運動を批判したものであるととらえ直している。

第二章は「喝采」（1958.9）を中心にしながら、主人公である日本人の大学生が、「正真正銘」（オタンティック）な自己同一性の獲得を探求していく過程を、フランスの外交官との同性愛的な関係性とのかかわりで分析している。この論点はサルトルの「正真正銘性」（オタンティシテ）という概念と深くかかわっており、アルジェリア解放戦争を中心とする「第三世界」指向の運動と大江文学のつながりを証明するものとなっている。

第三章と第四章では「われらの時代」（1959.7）が中心的に論じられている。ケルアックの「路上」に内在されている北アフリカやアラブに対する姿勢をとりこみ、ミラーの「冷房装置の悪夢」のアジア認識をも考慮に入れながら、大江がこうした「世界文学」における「第三世界」への言及を、どのように自分の小説に取り込んでいったのかが説得的に明らかにされている。

こうした分析と証明をふまえながら、ギュヴェン氏は、大江健三郎が「世界文学」を脱文脈化しながら、「われらの時代」を含めた自らの文学を、「第三世界」の文学として位置づけなおす（マッピング）実践を行ったとしている。ここではサイードが『文化と帝国主義』で提示した「模倣しつつの反転」という理論的枠組が有効に使われている。

第五章では大江が「セヴンティーン」（1961.1）や「叫び声」（1962.11）で用いた、サルトルの「怪物」（モンストル）という概念を中心に分析を行っている。サルトルが「monstre」という概念を選択するにあたって、その語源としてのラテン語「monstrare」という動詞の「見せる」「明視させる」「露

呈させる」という意味を意識していたことをふまえ、大江が「世界の矛盾」を「周辺」的な立場から「露呈」(monstrare)する存在として作家を位置づけていたことを証明している。あわせて、フランス・ファノンの植民地主義と暴力との関係をめぐる理論がふまえられていることも明らかにされている。

結論においては、1950年代後半から60年代前半における大江文学が、同時代の脱植民地化の運動や「第三世界」としての非同盟運動と深く結びつきながらも、「第三世界」文学とは異なることを、大江自身の日本に対する批判から照らし出している。自国の帝国主義への関与を批判しつづけたフランス人のサルトルや、パレスチナ系アメリカ人サイドの位置のとり方と重なるものとして、大江の戦前戦中戦後の日本に対する批判的姿勢を評価しているのである。

公開審査においては、「第三世界」文学がナショナル・アレゴリーになっているというフレドリック・ジェイムソンの指摘とのかかわりで、大江文学をどのようにとらえるのかが明確ではない、という指摘があった。また分析のキーワードになっているフランス語の概念いくつかについて、十分に正確な用いられ方になっていないのではないかという批判もなされた。さらに「第三世界」という概念が、時代によって付与される政治的意味が異なっていることに対する十分な分析がなされていないという指摘もなされた。

しかし、ファノン・サルトル・サイドといった帝国主義的植民地主義を批判した最もすぐれた思想的言説と、大江健三郎の初期の小説表現が最も深いところで結び合っていることを証明したことは高く評価された。なによりも「第三世界」という枠組を用いて、大江文学を「世界文学」の中にマッピングすることの妥当性は、すべての審査委員に納得されていた。

また大江健三郎の文学についても、日本文学研究の内部だけでは全体像を論じ切ることが困難な状況の中において、「世界文学」という枠組を意識的に用いることによって、明確な位置づけを与えることが出来るという可能性を示したことも高く評価された。そして大江文学における「第三世界」性を論じることが第二次世界大戦後の歴史過程において、世界の政治的局面ごとに、異なった意味を与えられてきた「第三世界」の概念をとおして、歴史過程そのものをとらえ直す契機になることを示した点も認められた。

以上の論点から本論文が博士号請求論文として十分な内容であるという点で審査員の意見は一致した。

したがって、本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。